岡山のとしょかん

No. 85

図書館運営に当たって

岡山県図書館協会会長
岡山県総合文化センター館長
広江寿彦

図書館の今後の方向・在り方については、旧文部省の生涯学習審議会の答申や日本図書館協会の研究などに、社会の進展を踏まえた重要な点が述べられている。ここでは、観点を変え、行政と密接な関係を持つ公立図書館について、特に配慮が必要であると思われる事柄について述べたい。

その一つは、財政である。国・地方併せて約六百四十兆円の長期債務がある。さらにこの額は増えるものと予想されている。この重圧が、図書館界に、いつどのような形で押し寄せるか、分からないが、大学や博物館・青年の家では合併や独立行政法人化という波がきている。あらゆる行政サービスについて、その有用性が議論され、行政機関の存在性を問われる時代がくると思う。

図書館運営に当たって、無駄を省き、効率的な運営に努めるのは当然として、重要なことは、図書館が二十一世紀の日本にとって、あるいは、地域の振興のために欠くことのできない存在となることである。図書館が、住民の知る自由や生涯学習に役立つ、といういわば個人レベルの議論と同時に、国家・社会の発展に役立つものであること、公から支出された経費が、公に還元されるものであることをアピールすべきである。

二つ目は、市町村の広域合併である。人口減・高齢化が進むなかで、新たな行政サービス・高度な行政サービスが求められ、この問題はさけて通れないことと思う。

広域合併が進めば、形のうえでは、図書館の未設置市町村は解消されるかもしれないが、域内均一な、そして高度な図書館サービスが求められてくるのは当然である。全域サービスは、地区館を設置していく、あるいは、移動図書館を運営していく、逆に、住民を車で中心部まで運んできて、そこで、文化・スポーツ・福祉と多種多様な行政サービスを提供することも考えられる。専門的で、高度な図書館サービスの提供については、市町村合併による図書館の統合や強化された財政基盤で対応することとなるが、それだけでは十分でない。近隣の図書館、県立さらには全国の図書館・関連機関とのネットワークが欠かせない。自館だけで考えるのではなく、地理的にも、機能的にも網の目となった関連機関の協力を得ることによって、高度な図書館サービスが可能となる。

三つ目は、行政における意志決定の仕組みの変化である。従来、図書館政策について、国において、規制や支援が行われていた。地方では、国の関与を受けながら、首長や教育委員会が大きな方向性を決めていた。今は、地方分権・規制緩和の流れのなかで、国による関与は少なくなっている。今後、設置者自身が住民の意向を体して、自ら決定していくべきものであることが強く意識されるようになる。

四つ目は、図書館の運営である。図書館は、従来、図書館自身が比較的自由に運営を行ってきた。今後は、先ほどの財政のように、図書館にとっては新たな「枠組み・制約」ができると思う。そうしたなかで、図書館の評価を行うのは住民であり、住民に軸足を据えた運営が大切である。

公立図書館は、従来、資料の整備・提供など利用者サービスの充実に意を注いできたが、今後は、さらに、先ほどの社会的背景を念頭に置いて、図書館をできるだけ多くの方に、よく、利用していただき、図書館の有益性・必要性を住民に理解していただかなくてはならない。さらに、こうした住民の期待、満足、評価が、議会や行政に反映されるよう働きかけていくことが必要になり、また、そのことによって、図書館がより充実していくこととなる。

参考

一、長期債務残高（財務省）
http://www.mof.go.jp/jouhou/syukei/sy014.htm
二、市町村合併（岡山県市町村課）
http://www.pref.okayama.jp/kikaku/sichoson/gappei00.htm

“子ども読書年を振り返って”

●“こどもと本—おかやま—”
●「子ども読書年・おかやま」

“こどもと本—おかやま—”の活動を振り返って

——子ども読書年をスタートに——

（こどもと本—おかやま—事務局　藤井教子）

〈こどもと本—おかやま—発足〉

ことの発端は、平成十二年一月九日に日本図書館研究会・中国地区ブロックセミナーが、オルガホール（岡山市）で開催され、参加した帰り道でのことでした。〝行政の立場と図書館の立場〟というテーマで熱く語り合い、興奮さめやらぬまま喫茶店に場を移し、また語り合いました。そんな中で「今年は子ども読書年ですね。何かしたいですねぇ。」と誰とはなく話が出て〈岡山を拠点にして、全国に発信!!〉などと夢はどんどんふくらみ、夢を胸にその日は各人家路につきました。

「あれから、あの話はどうなったの?」という声があがり、三月二十三日に第一回準備会が、岡山市立中央図書館で開かれ、文庫活動、図書館、子ども劇場の関係者や主婦等が集いました。

“こどもと本—おかやま—”発足式（下）と記念講演（上）
（2000.6.3　岡山県生涯学習センター）

どういう目的で、何がしたいのかひとつひとつ明確にしていくことから始めました。協議に協議を重ね、名称は〝こどもと本—おかやま—〟に決定。会則、活動内容、役員等の骨格ができ、肉付けができていきました。子どもが好き、子どもの本が好きという人たちの集まりなので、夢を現実のものにしていく熱意は、妥協を許さない気迫に満ちていました。

ともあれ、ついに発足にこぎつけ六月三日、県生涯学習センターにおいて、発足式と記念講演会（講師は村中李衣氏　梅光女学院大学教授で児童文学作家）を開催しました。「対話の生まれる瞬間—絵本の読みあいをとおして—」という感動的な講演に、即日百名を超す入会者があり、市民団体である私たちの活動は、幸いな第一歩を踏出しました。

現在、会員は百七十名を超え、会報〝子ども読書年をスタートに—えほん大好き—ニュースレター〟を三号まで発行しました。

活動報告、今後の予定については箇条書きにまとめました。

〈活動報告〉

一、六月三日　発足のつどい（前出により略）

二、七月十五日　フィルムケース笛「オカリナちゃん」と遊ぼう!!　サイエンスレンジャー長井正三郎氏　（於）岡山市吉備公民館

三、八月十九日　国際アンデルセン賞・IBBYオナーリスト受賞図書展　猪熊葉子（JBBY会長）講演会／岡山市立中央図書館と共催　（於）西川アイプラザ〈図書展は十九日～二十五日〉　図書展資料・講演会資料の作成

四、九月十七日　読書で遊ぼう「アニマシオン」　NPO図書館の学校事務局長佐藤涼子氏（於）まきび会館

五、十一月十九日　手ぶくろ人形をつくろう!（ねずみを作成）守谷瑛子氏　（於）吉備公民館　ねずみの本リスト作成と活用指導

六、十一月二十一日と十二月六日　図書館流通センター・全国ブックフェアーにて手袋人形講習会／共催　（於）広島産業会館と東販岡山支店へびとりす、バーババとバーママを作成

藤井教子と守谷瑛子氏

七、十二月十九日と平成十三年一月二十四日　お話キャラバン隊　英田郡大原町と総社・常盤幼児クラブ

八、二月十四日　実践「絵本の楽しみ方」—会員相互による（於）岡山市立中央図書館

〈現在の取り組み〉

昨年十月三日を第一回編集委員会とし〝赤ちゃん絵本のブックリスト〟の作成に着手。各方

面からの要望が強いので、自分たちが実践した本を、体験を交じえて読みやすいリストに。

〈今後の予定〉

一、三月十八日　翻訳家金原瑞人氏講演会／童話工房びあのに協賛（於）岡山国際交流センター

二、四月二十二日　佐々木宏子氏講演会　鳴門教育大学教授　（於）さんかく岡山

三、八月下旬　ストーリテリングを楽しむ　佐藤凉子氏

〈追記〉

私たちの活動は、子育て真っ最中のお母さんたちが参加しやすいように、いつも託児付きです。

“「オカリナちゃん」と遊ぼう”会場風景

「子ども読書年・おかやま」から

（伊島小学校　学校司書　宇原郁世）

「子ども読書年・おかやま」が発足したのは、二〇〇〇年二月十六日、メンバーは、代表の八束澄子さん（児童文学作家）はじめ、学校図書館や公共図書館の司書、文庫の関係者、童話サークルでお話を書いている方、子ども劇場の方、昔話の語り手など様々です。発足後、月に一回の運営委員会と事務局会議を持ち、さまざまな活動を展開してきました。簡単にご報告します。

①自治体アンケート

子どもたちの読書環境は今どうなのか、あわせて、県内の自治体では、子ども読書年に関連してどのような取り組みが行なわれているのかを調査してみよう、ということで、県内のすべての教育委員会を対象にアンケートを行ないました。七十六教育委員会中五十四教育委員会から回答をいただきました（回収率七十一・一％）。

また、自治体ごとの書店数や学校数、学校司書の配置状況を調査し、自治体アンケートと合わせて「岡山県の読書環境MAP」にまとめてみました。その結果、予想以上に読書環境の格差が大きいことがわかりました。まとめはそれぞれの自治体にお返ししましたので、各自治体で図書館充実のきっかけになればと願っています。

②子どもベスト10調査

子どもが今実際にどんな本を楽しんでいるのか、好きなのか、そのホンネをありのままに出してもらおう、「これぞ、子どもが選んだベスト10だ！」という調査にしたいと、取り組みました。

県内の児童・生徒二万六千人から回答が寄せられ、パソコンの打ち込み作業にはたくさんの方が協力してくださいました。そして小学生の部で人気ナンバー1だった原ゆたかさんに、十二月の「子ども読書年・おかやまのつどい」にきていただくことができました。

子どもベスト10　小学生の部第1位であいさつする原ゆたかさん

③おはなしキャラバン隊

県内のおもに図書館や書店のない地域、学校司書もいない地域の子どもたちに、人気の本やワクワクするお話、ふだん図書館で行なっている楽しい行事（ブックトーク、パネルシアター、ペープサート、エプロンシアターなど）をもって出かけ、一日出前図書館を体験してもらおうという活動です。

本やお話の楽しさを伝えることを通して、現地の方とご一緒に豊かな読書環境づくりへの願いを交流する取り組みでもありました。県内の十八か所を訪問し、千二百人を超える子ども・大人がお話の世界を楽しんでくれました。キャラバン隊をきっかけに、地域での図書館づくりに動き出された町もあります。

④「おすすめブックリスト　こんな本よんだ？」

子どもと本に関心のある方へアンケートを送り、約五百名の方から回答を寄せていただきました。皆さんが書いてくださった書名は延べ四千件にのぼり、お一人お一人の、子どもの本に寄せる思いがにじみ出てい

るように思いました。

その中から比較的新しく、今の子どもに届けたい本を担当者と事務局メンバーで検討して選びました。約九十冊が一言コメントとともに掲載されています。

⑤「子ども読書年のつどい」

二〇〇〇年も終わりが近くなった十二月六日に、岡山市立中央公民館を会場に「子ども読書年・おかやまのつどい」を開きました。内容は、お話の世界をさまざまに楽しむ（岡山弁で民話の語り、手遊び、蛍光パネルシアター、ブックトーク、大型紙芝居など）ものや、人気の本・おすすめの本の展示、キャラバン隊の写真報告、そしてシンポジウムでした。

同じ時間、子どもたちは「ゾロリの作者とゾロリをかこう」というお絵かき会をもっていました。子どもたちは、大好きなゾロリの作者と出会え、緊張しながらも楽しい時間をすごしました。

子ども読書年は二〇〇〇年で終わりましたが、「子ども読書年・おかやま」で広がった出会いを大切に、子どもと本を考える輪をこれからも広げていきたいと思います。

会員の声

特集 ～二十一世紀を迎えて～

・図書館の未来は？
・司書の未来は？
・インターネットやIT革命はどうなるのか

利用者に感謝を!!

三谷　洋子
（玉野市立図書館）

私は学校司書から公共図書館司書になり、随分と多くを学び、多くの市民と接することができました。

学校の中では、図書の時間、貸出、返却、行事等、いろいろ工夫して児童を図書室へとがんばってきました。

子どもの読書は、まず楽しみとして、又子どもの成長に少しでも有益であること。「おはなし」を聞いたり、物語の楽しさを知ってほしいと考えていました。

公共図書館にきてからは〇才～八十才までの人たちの利用に驚きました。と同時に自分がいかに知らない事が多いということや、図書館員としてとても不安がありました。でも利用者の要求やレファレンス等により、どんどん成長せざるを得ないと不安をいだきながら、利用者に育てられてきて八年がすぎました。コンピューターが入ってからは、資料検索もくわしく早く資料の有無もわかるようになり、資料の見つかった時のうれしさは利用者以上に司書としての喜びがあります。又資料不足の時や利用者に満足してもらえない時はとても悲しく思います。

これからIT時代になっていくと、それなりの未来があるかも知れませんが、私たちは今、利用者に気持ちよく接することができるように、〝あいさつ〟〝利用への感謝〟の、「ありがとうございます」を忘れないようにしています。残り少ない図書館としての仕事を、未来の展望より、今の中で、どのように、サービスをしてがんばって行きたいです。

図書館＝ニューメディア情報館か？

小林　信治
（金光図書館）

子供の宿題が変わった。「図書館で調べてきましょう」から「インターネットで調べてきましょう」になったのだ。パソコンの普及率は百％ではないから、図書館で端末を開放していれば、図書館に調べものに足を運ぶことになるのだが……。

ビデオを見ることだけを目的に図書館に通ってくる子供達に違和感をおぼえていたが、DVD、デジタル放送、ハイビジョン……と、今後図書館が提供を求められるであろうニューメディアは増えつづけている。最新の情報発信基地としての図書館の未来は想像に難しくない。だが……。

時代に逆行する気はないが、こんな時代だからこそ大切な図書館の役割がある。専門職としての司書がいて、資料と利用者の取次ぎをする血の通ったサービスこそが、図書館本来の姿ではなかったか。

図書館の未来を思うとき、「ポストの数ほど図書館を」という、いささか使い古されたフレーズが輝いて見えるのは、私だけではないはずである。

図書館の将来

矢吹　礼子
（倉敷市立短期大学付属図書館）

昨年末に、地域電子図書館構想検討協力者会議から、『二〇〇五年の図書館像～地域電子図書館の実現に向けて～』なる報告書も出された。電子図書館の時代がやって来そうな気配である。

大学図書館では自館のオーパック

を公開している所も多く、現実にインターネットで調査したとの問い合わせも多い。自宅に居ながらにして、必要なときに、必要な情報を取り出せる電子図書館への需要は高まるであろう。

しかしながら、情報の多様化、複雑化などにより、一館で可能な資料収集には限度があり、館種を越えた相互協力がますます必要になってくる。こうしたなかで大学図書館の専門性が注目されるであろう。大学図書館の開放をいかにするか、それがキーポイントになりそうである。

新世紀こそ図書館の時代に

黒崎　義博
（県図書館協会理事）

今や国をあげてIT革命に狂奔していますが、情報の無法地帯インターネット犯罪が氾濫し、人間の心は失われつつあります。

機械は飽迄道具であり、補助手段に過ぎません。機械が目的となり主人公になった時、仮想現実と現実の判断がつかなくなって人間は「考える葦」からロボット化し、滅亡への道を歩みはじめるでしょう。

それを救えるのは人間自身の良識であり、その手伝いをするのが図書館です。

世の中は変っても真理は変りません。図書館は読書だけでなく、人と知識、人と人のふれ合いから豊かな人間性と知恵をはぐくみ、新しい文化と創造が生まれる人間が人間らしく生きていく為の母胎であるとの確信を持って、情報機器を上手に利用しながら、二十一世紀を図書館の時代にする責任があります。

図書館に望むもの

衛藤　廣隆
（岡山理科大学理学部事務室）

図書館の機能は「読書」の支援である。そして、「読書」の本質は情報の入手である。媒体や読み取る方法は、時代や社会環境で異なる。この視点から、これからの図書館がどうあって欲しいかを列挙する。①多様な媒体に強くあって欲しい。②情報の流通と蓄積に目配りして欲しい。③多様な利用者に対応できる力を持って欲しい。この三点が基本である。常に変化する社会の中で、人間は生きていかなければならない。その時々、人は情報を必要する。目前の問題を解決する為の数値や規則、より深く人生を考えるための論評や物語、それらを可能な限り集め、蓄え、提供して欲しい。世紀が変わっても、不平等や差別はある。貧困も公害もある。この社会で図書館が有効に機能するかどうかは、そんな世の中を生きていく上で、人々が必要とする情報を如何に提供するかにかかっている。具体的な建物の大きさや資料費の多寡は現実の制約が大きい。制約の中で地域や館種の特色を生かす努力をして欲しい。

リアルとバーチャルの交差点

綾野　静子
（県立倉敷商業高校司書〈主査〉）

本校では昨年の十月からデータベース利用促進実験校となっている。（期限は平成十三年三月まで）三十紙以上の新聞や写真データ、統計資料などが、リアルタイムで膨大な情報が居ながらにして入手することができる。図書館を利用する授業には大変な威力を発揮している。

しかし、いとも簡単に自分に必要な資料を入手し満足している生徒の顔を見ながら、素直に喜べないものを感じてしまう。資料の入手が本質的な課題ではなく、それらを駆使して「論」を展開することこそが課題だとはわかっていても。

図書館はいわばバーチャル世界である。そこにある資料によって「体験」やら「現実」をさらに確かなものにしていく、という場であった。しかし、「体験」を持たない世代の出現を見て、図書館のベクトルを双方向にする時が来ているのではと思う。たとえば資料の力で、「現実」へ「体験すること」へと押し出す力を持つというような。

図書館の未来

原　弘江
（岡山県総合文化センター司書）

インターネットの発達で図書館に行かなくても情報が入手できるようになるのでは？と、CMなどでよく見かけます。

インターネットでの検索等では必ずコンピュータを介します。

コンピュータと長らくお付合いをして実感することは「人間のほうが頭がいい」ということです。

確かに多量の単純なデータを扱う早さ・正確さにかけては人間は負けますが、経験に基づき応用していくといったことが彼らはまだまだ不得手です。また、データ化されていない部分については彼らは手も足もでません。

インターネットが発達しても簡単に見つからなかったようなケースや難しいレファレンスがふるい落とされて図書館の現場に来るのでしょうか？

彼らの良い点を使う術も身に付けた上で、彼らの力の足りない点で司書の腕を振るえるような未来の図書館員になりたいものです。

朝の十分間読書

～三年目を終えて～

（山陽女子中学・高等学校）
塩山　啓子

「たくさん本が読めてよかった。朝読がなかったら、今まで読んだ本に出会うこともなかったと思う。最初はスッゲーめんどくさかったけど、プラスになったり、感動できたことが嬉しい。」

私が担任している三年B組もあとわずかになったある日、「朝の十分間読書」についてアンケートをとった。この文章は、その中のM子のものだ。いつか掃除をサボったことを注意すると、「先生がすればいい」と吐き捨てるように言ったM子の書いた文章を見て、私は驚き感動した。そして、「朝の十分間読書」をやっていて本当によかった、と心から思った。高一、二と欠席しがちだったS子も、「先生がもってきてくれた本で、いろんなジャンルの本が読めた。朝読の時間をもう少し長くすればよいと思う。」と書いていた。高三で発憤し三百番も順位を上げ、日本文学を極めたいとついに大学進学を果たした。内に秘めたエネルギーに驚かされたS子とは、本を介して話すことが多かった。私が図書館から時々運ぶ本にいつも関心を示してくれ、熱心に読んでいた。「朝の読書」も三年目を終え、感動のドラマがあちこちで生まれている。

山陽女子中学・高等学校が「朝の十分間読書」の実施について検討を始めたのは、平成九年のことであった。実はそれより十年前、本校では秋の校内読書週間中に「朝の三十分間読書」を実施していた。一年に数日ではあるが全校が静寂に包まれ、とても落ち着いた時間を過ごすことができた。何とかこの時間を広げたいと思いつつ、どういう方策があるのかわからないままで十年が経過した。ちょうどその時、林公先生の『朝の読書が奇跡を生んだ』を図書課を中心にした教師が読み、これしかないという思いに駆られた。それからほぼ一年をかけて図書課会議、学年会議、職員会議を重ね、平成十年からの実施にこぎつけることができた。その時の話し合いの視点は、生徒のおかれている状況をどう理解し、生徒と学校をどう変えていくかということであった。そして、「朝の十分間読書」を実施する目的を明らかにし、指導上の注意としては何があるのか担任の抱いている疑問を出しあい、ひとつひとつ話し合いの中で解決をしていった。三月には千葉から林先生をお呼びし、教職員研修会としてご講演をいただいたことは、実現に向けて大きなはずみとなった。そして今、全校三十七クラス、一三七五名の生徒と教職員のほとんどが、毎朝八時四十五分から五十五分までの十分間、静寂の中で読書に励んでいる。

本校で「朝の十分間読書」が実現できた背景には、図書委員会の活発な活動がある。昭和五十四年から全クラス一斉にLHR読書会を年二回実施していること、委員会主催の研修旅行や読み聞かせの会、講演会や校内読書週間中の展示など、さまざまな活動が展開されている。その結果、「平成十二年度生きる力をはぐくむ読書活動推進事業優秀実践校」に選ばれ文部大臣表彰を受けたことは、とても名誉なことであった。それらの活動の流れの中で「朝の十分間読書」が提案され、継続へのさまざまな努力が工夫されている。一つには、教職員に向けて年に数回「朝読だより」を発行し、生徒の思いや担任の工夫などを紹介するようにしている。また、読書に関する一行詩コンクールを実施し、生徒の関心を集めるようにした。今年の最優秀作品「さみしいな　朝の読書あと少し卒業しても忘れず毎日」は、生徒の実感あふれるすばらしいものであった。

現在の朝の読書についての問題点は、クラスに数人いるボーッとしている生徒、宿題をしている生徒に、いかにして読書の楽しさを伝えていくかということである。担任によっては、そういう生徒の顔を思い浮かべながら一冊ずつ図書館で本を選んでいる人、学級通信の中に本の話題をどんどんとり入れている人など、少しずつ教師と生徒との本を通してのコミュニケーションが深まってい

るように思われる。全校生徒を対象にした朝読アンケートの中に、「あなたは朝の読書の時間は好きですか」という項目がある。「好き、どちらかといえば好き」という回答が、平成十年度四十四%、平成十一年度五〇%、平成十二年度（高三のみ）五十三%と少しずつではあるが上昇している。また、「「朝の読書」が始まって何か変化がありますか」という項目については、何と五十一%の生徒が「本を読むのが好きになった、読書量が増えた」といっている。また十七%の生徒が「心に安らぎを覚えるようになった、心が落ち着いてきた、物事に集中できるようになった」と回答している。この数字を真摯に受けとめ、この「朝の十分間読書」を私たち教職員が主体的に取り組み、さらに発展させていきたい。

ウチのれふぁれんす

第3回　県立図書館では…（岡山県総合文化センターの巻）

ウチで解決できないレファレンス

（岡山県総合文化センター）
大村　文誉

ある日電話で、「魚偏に夏と書いて何と読むのですか？」という問い合わせがありました。声の主は年輩の男性。漢字の読み方を尋ねられることはよくあるので、早速定番の『大漢和辞典』（大修館書店）を見てみました。しかしそんな漢字は見つかりません。まあ魚偏の漢字だったら漢和辞典以外にもいくつか手段があります。時々使う『おもしろいサカナの雑学事典』（新人物往来社）という資料を見てました。「サカナ偏の文字」の項目に「鰒」という漢字がちゃんと出ています。そこには「オイカワ。サメ。フグ。」と書いてあります。「なんだ、もう解決じゃ！楽勝じゃったなあ」と思いながら得意げに質問者の男性へ回答の電話をかけました。

私の経験からすると、以上でレファレンス終了の場合が多いのです。しかし今回の質問者は違いました。さらに質問をされました。「それは一体読みなんですか、意味なんですか？」「その本は何を根拠にそう書かれているのですか？」「魚偏に夏ということは大体夏に関係のある魚だろうと思うのですが、今言われた魚はどれも夏とは関係ないんじゃないんですか？」等々。私も電話口では何も返答できず、調べ直すことにしました。

しかし「鰒」なんて漢字は先述の資料以外にはなかなか見つけることができません。『大漢和辞典』にも出てないような漢字の意味や由来を詳しく書いているような資料なんて、本当にあるの？」と、半信半疑のまま国会図書館へレファレンスを申し込みました。正直言って、納得のできる回答は期待していませんでした。

約一カ月後、国会図書館から回答が返ってきました。詳細をここで紹介することはできませんが、『瓊浦偶筆』（平沢元愷著　安永三年刊）に「サメ」と出ていることや『大和本草』（貝原益軒著　宝永六年刊）には「ハエ」と出ていることなど、実に丁寧に調べられていました。「一体どうやって調べたんだろう？」とつくづく感心しましたが、とにかく助かりました。

この国会図書館からの回答を伝えるべく、質問者に電話をしました。「そこまで調べてくださって申し訳ありませんなあ。本当にありがとうございました。」と、大変感謝されました。

私の個人的な印象では、国会図書館は回答が遅い上に納本漏れの資料が多いなど、どちらかというと不満に思っていました。しかし、今回は恐れ入れました。同時に国会図書館に大変感謝の気持ちを持ちました。

レファレンス能力の強化のために理想的な方法は、自館資料を充実させ、それら資料を職員が熟知し、使いこなすことができる体制を整えることでしょう。特に県立図書館にはレファレンス体制の万全なる整備が

望まれています。

しかし、どの図書館でもそうでしょうが、資料費の不足は悩みの種であり、なかなか思うように資料を充実させることができないのが現状です。

また最近は情報ネットワークの発達により、どの資料がどの図書館にあるか比較的容易に知ることができるようになりました。参照したい資料が当館になければ、所蔵館を総合目録等で調査し、その館に調査を依頼することもしばしばです。同様に他県から当館に調査を依頼されることもあります。これからはレファレンスを他館に依頼したり、されたりという事例が増えていくだろうなあと思っている今日このごろです。

ニュース(十一月～一月)

〈市立図書館関係〉

★津山東中学校の一年生が津山市立図書館などで職場体験
(津山朝日 00・11・15)

★岡山市立幸町図書館が開館時間延長して七ケ月。利用者には好評 PR不足原因?来館者は伸びず
(山陽00・11・18)

★笠岡市の移動図書館車 新車に
(読売00・12・8)

★参勤交代行列絵図 津山市に寄贈 図書館等で公開
(読売00・12・13)

★岡山市立中央図書館で原画展開催 岡山の文化 かるたで
(山陽01・1・10)

★津山市立図書館が情報案内の新しい市民掲示板「ごんちゃんひろば」を開設 広く利用呼びかけ
(津山朝日01・1・11)

★笠岡市・福山市 二市の市立図書館が両市の市民に貸し出します 来月一日から
(中国01・1・17)

〈町立図書館関係〉

★久米町立図書館で、中国語と日本語による絵本の読み聞かせ会
(津山朝日00・11・15)

〈大学図書館関係〉

★中国短大創立四十周年記念 新図書館を建設 来夏完成 地域にも開放
(山陽00・12・6)

〈学校図書館関係〉

★学校図書館研究大会 新見で開催 四百六十人が参加
(山陽00・11・10)

★芳泉高校図書委員ら 欧州伝統宮廷舞踏を学ぶ 世界の文化を理解
(山陽00・11・23)

〈一般〉

★図書館の未来示す 東京で総合展
(山陽00・11・21)

★国会図書館 昭和前期の文献、販売 蔵書五万冊CDに
(朝日00・12・18)

★生涯学習審 図書館の在り方提言 夜間や祝日開館を
(山陽00・12・27)

日誌(十一月～二月)

11・17 第三回企画委員会
(会場・総合文化センター)

11・24 第二十三回全国移動図書館・協力事業研究集会第二回準備委員会
(会場・総合文化センター)

12・13 パソコン研修会
(会場・生涯学習センター)

1・26 第一回図書館業務研修会
(会場・生涯学習センター)

2・7 岡山県図書館職員等研修会
(会場・生涯学習センター)

2・21 第二十三回全国移動図書館・協力事業研究集会第三回準備委員会
(会場・総合文化センター)

2・21 第二回理事会
(会場・総合文化センター)

事務局から

・新世紀最初の会報は、まず協会会長の随想に始まり、昨年の「子ども読書年」の総括、新世紀を迎えて思うことをテーマとした〝会員の声〟、今注目の「朝の十分間読書」のレポート、連載の〝うちのれふぁれんす〟と盛り沢山になり、久々の八ページ発行となりました。原稿をお願いして快くお引き受けいただいた方々には感謝申し上げます。特に、山陽女子中学・高等学校の塩山先生には、当協会からの依頼に対して特別の御配慮で御寄稿くださり、ありがとうございました。

・年度変わりで、所属・住所等の変更も多いと思いますが、その節は、ぜひ事務局まで御一報ください。

平成十三年三月九日
〒七〇〇－〇八一四
岡山市天神町八－五四
岡山県総合文化センター内
岡山県図書館協会
会長 広江寿彦
☎(〇八六)二二四－一二八六
(内二四五)